

◇衝撃的だった「群フィル」移動音楽教室

「群馬フィルハーモニーオーケストラ」（後の群馬交響楽団）をモデルにした映画『ここに泉あり』（岸恵子、岡田英次主演）が作られたのは昭和30年だった。ところが、それよりずっと以前の昭和25年の頃（小生は小学3年生）、私が通う小学校に「群馬フィルハーモニーオーケストラ」が、移動音楽教室としてやってきたのである。

先生から、「群馬フィルハーモニーオーケストラ」の由来やオーケストラについての説明を受けたように記憶しているが、それがどんなものなのか想像すらできなかつた。というのも、当時の時代背景として各家庭にまともなラジオさえ無かつた時代であり、ましてや生の映像や音楽などに全く接したことがなかつたのである。

あえていうならば、音楽の授業で先生の弾くオルガンの音色くらいだったろう。

群フィルがきた当時、当小学校は生徒数1,500人前後の大規模校だったが、生徒が一同に集合できる講堂や体育館などなかつた。そこで、全学年が対象の全校朝礼は通常校庭で行われた。また、文化祭や発表会、卒業式などの室内行事は、明治末期か大正時代に作られたであろうガタピシする平屋の古い木造校舎の三教室の仕切りを取払って行われた。そこで、「群馬フィルハーモニーオーケストラ」の移動音楽教室もこの仕切りを取っ払った教室で開かれたのである。（1,500人の生徒が、一同教室に入りきらず、学年毎に分かれて鑑賞したのかどうかまでの記憶はない）オーケストラの演奏席は俄か舞台上、高さが30センチ程度の台を並べたような（と記憶しているが）狭い空間にいろんな楽器が所狭しと配置された。聴き手である生徒たちは、椅子でなくて冷たい板張りの床に直に腰を下ろし楽団と向かい合いで目と鼻の先の鑑賞だった。

■写真上・映画「ここに泉あり」上映時のポスター。

■写真下・鑑賞時にいただいたチラシ。・映画の詳細については忘れてしまったが、残念なことに映画の中で演奏されたのは群馬フィルハーモニーオーケストラでなくて、東京フィルハーモニー管弦楽団の演奏だったということである。



ところが、私自身の席は最前列の右の隅で、目の前は見上げるほどの大きな楽器（コントラバスだったろう）を抱えた燕尾服姿の楽団員が構えた。

演奏会が始まるにあたって校長先生等の挨拶や関係者によるオーケストラのことや各楽器の説明や音出しなどが長々とあったと記憶しているが、心はうわの空でろくにわからないままに演奏会が始まった。すると突然指揮者たるものが、タクトを振り上げると♪ジャジャーン…と聞いたことのある音楽がかっこよく流れ、そのど迫力に度肝を抜かれ、体が反り返るほどだった。

幾つかの演奏曲目のなかで忘れられないのは、NHK ラジオ第1放送の朝番組がスタートするとき流れる「早起き鳥」のテーマ曲だった。他にどんな曲目が演奏されたかは今になっては思い出すことは出来ないがNHKの「早起き鳥」のテーマソングだけは身近（当時、ラジオの視聴は欠かさなかった）で余りにも強烈な印象だったので今でも忘れることは出来ないでいる（今でも口ずさめる）。演奏会が終わっての感想は自分でも説明がつかない感動を覚えた記憶がある。

社会人になって、一人でラジオやテレビなどのクラシック音楽の番組を視聴していると父は、また「カラヤン」かと苦笑していたことがある。（父はクラシック音楽=カラヤンで、プロ野球=巨人と思い込んでいたようだった）

父は、クラシック音楽のことやオーケストラの指揮者であるカラヤンを知っていたのかどうか定かではなかったが、知識豊富な父のことだから少しは理解していたのだろうかと思った。また、父がクラシック音楽を聞くのか聞かないのか確かめたことはなかった。

過去のテレビコマーシャルで「違いがわかるわかる男のゴールドブレンド」というインスタントコーヒーの宣伝があったが、この宣伝の本意は、本物がわかるには本物と紛い物の違いがわかる感性がなければならず、それにはより多くの本物に出会い、感性を育てるということが非常に大事なことだと云いたいのだと聞いたことがある。

ちょっとオーバーかもしれないが、自分自身もこの素晴らしい音を聞かせてくれた群フィルとの出会いが無かったなら、オーケストラ演奏によるクラシック音楽を聴いてみたいという思いが生まれなかったのではないかと思っている。

余談

昨年2018年10月号の菱の実会ネット版に「近頃雑感」を投稿させていただきましたが、その余談の中で「太田市美術館・図書館」にて開催中の「ことばをながめる ことばとあるく—詩と歌のある風景展—」の中の一つとして私の伯父夫妻である「大槻三好・松枝夫妻短歌と惣田紗希=イラストレーター」とのコラボによる「短歌・イラストレーションコーナー」について紹介させていただきましたが、この関連記事が2019年11月15日付の「足利経済新聞」のネット版に紹介されていたのでそのまま転載させていただきました。

～足利のデザイナーが文芸書 歌人・大槻三好と松枝の世界観を表現～

足利市出身の「惣田紗希・そうださき」さんの文芸書「山風に乗って歌が聞こえる 大槻三好と松枝のこと」が2019年10月7日、タバブックスから発売された。

昨年、「太田市美術館・図書館」で開催された「ことばをながめる、ことばとあるく詩と歌のある風景展」に出展した作品がタバブックスの担当者の目に留まり、今回の出版に至った。昭和初期の歌人、大槻三好と松枝夫妻の短歌から選出したものにイラストを描き起こし、装丁、エッセイまでを惣田さんが手掛けている。「風」を感じる環境である太田市にちなんで、爽やかな色見のカバーにしたという。夫妻が同市の金山で逢瀬を重ねるなど、生活の一部に山があったことから、カバーの文字は山の土の色をイメージ。少し小ぶりのサイズは「松枝」の遺作「紅椿」と同じサイズにこだわった。



大槻三好は生活の記録として短歌をつづったが、出版された歌集はすでに絶版となり、若くして死去した妻、松枝の亡き後、遺作として出版された「紅椿」も現在、入手困難となっている。惣田さんは「資料がどんどん失われてゆく中で、夫妻の歌を形にして残したい、配信したい」と話す。惣田さんのお気に入り最後のページの和歌だという。

惣田さんは「90年も昔の歌だが、生活の様子がありありと見えてくる。妻であったり、夫であったり、一人の女性として、一人の男性として、共感できるところが少ないのでは。文語短歌とは違い、口語短歌は自由でみずみずしい。絵があることで想像もしやすい。タイトルにある『風』を感じる絵にした」と同書について話す。価格は1,700円（税別）です。興味のある方ぜひ！※タバブックス（東京都世田谷区代田）

私は所帯を持ったころ木崎に住んだが、近所に「松枝」さんと女学校時代の同級生という方がおられて、松枝さんの遺稿である「紅椿」を持っているので貸してくれるというので読んだことがあったが、50年近く昔の事で内容について忘れてしまっていた。そこで、私は早速購入して懐かしく読ませてもらった。90余年も前の歌とはとても思えない。色あせていない。口語歌でもあるからであろう。伯父さんは定年後、絵画の個展や短歌の他いろんな著作を出版したため拡販の手伝いをさせてもらった。（私の父と大槻三好は異父兄弟。三好の父は日露戦争乃木軍で戦死した為、旧家を守るため東京に留学していた弟（私の祖父）が呼び戻され、三好の母と逆縁となった。その長男が私の父）（2019/12/20 記）